

126

○井上外務卿ヨリ太政大臣宛

明治十三年十一月十三日

(井上毅ノ持歸リタル條約案及附屬書類)

三條太政大臣宛

井上外務卿

別冊井上毅ノ報告中琉球處分條約案合四通其甲號ハ琉球ノ中宮古八重山
二島ヲ以テ清國ニ屬シ以テ二國ノ疆界ヲ^清議メ從テ日清條約ヲ増加シ以テ
和好ヲ表明スルノ專約トス其乙號ハ増加條約ノ條款ニシテ即チ我政府ノ
要求スル所ニ叶同シタル者ナリ其丙號ハ我カ各國ト條約改正ノ機會ニ際
シ清國ト現行條約改正ノ年限ハ仍ホ數年ノ後ヲ待ツヲ以テ其年限ヲ短促
スルノ要求ニ對シ彼レヨリ承認ノ證據トシテ兩國ノ大臣ノ間ニ取換スヘ

136

キノ文單ナリ其丁號ハ二島ヲ交割スルニ就キ期限及手續ヲ示ス爲ノ約束
ナリ右四通ノ内甲乙ノ二通ハ追テ批准ヲ要シ丙丁ノ二通ハ兩國大臣ノ鈐
印ニ止マル者トス

甲乙丙三通ノ文案ハ即チ宍戸公使ニ委任サレタル我廟議ニ齟齬スル事ナ
ク條章ノ結構ト文字ノ修飾ハ稍小異アリト雖モ其實效ハ則チ原案ニ大同
ナリトス因テ最初ニ宍戸ニ下付サレタル増加條約案ヲ寫シ參照ニ供ス
右ノ文書ハ井上毅北京ヲ發途セシ時ハ調印ノ準備中ニ在リシヲ以テ其調
印ニ至ルノ日迄ニハ或ハ猶文字ノ潤色アルヘキモ料リ難シト雖モ其主旨
ニ至テハ聊カ變動アラサルハ彼レノ節略及照會ニ明言スル所ナリ
戊號宍戸公使ヨリ總理衙門ニ答ヘタル照覆文ハ前ニ已ニ報告ヲ經タル十
月十二日宍戸ヨリ該衙門ニ付シタル節略ト同様ノ主意ニシテ彼レヨリ節

137

P.V.M 10

912

P.V.M 10

911

略ヲ易ヘテ公正ナル照會ノ文ヲ與ヘン事ヲ求メタルニ因リ公使ヨリ其求
メニ從ヒ引換ニ交付シタル者ナリ
又井上毅ヨリ乙號丙號文書ノ説明書ヲ草シ報告シタルヲ以テ其説明書ヲ
併セテ閣覽ニ供ス

明治十三年十一月十三日

(別紙甲號)

○球案條約擬稿

大清國

大日本國以專重和好故、將琉球一案所有從前議論、置而不提、

大清國

大日本國共同商議、除沖繩島以北、屬

大日本國管理外、其宮古八重山二島、屬

大清國管轄、以清兩國疆界、各聽自治、彼此永遠不相干預、

大清國

大日本國現議酌加兩國條約、以表真誠和好之意、茲

大清國

欽命總理各國事務王大臣

大日本國

欽差全權大臣

各憑所奉

上諭、便宜辦理、定立專條、畫押鈐印為據、

現今條約、應由兩國

御筆批准、於三個月限內、在

大清國都中互換、

光緒七年正月
明治十四年二月
交割兩島後之次月、開辦加約事宜、

(別紙乙號)

○加約擬稿

大清國

大日本國辛未年所訂條約、允宜永遠信守、惟以其內條款有須一二變通、

是以

大清國

欽命總理各國事務王大臣

大日本國

欽差全權大臣勳二等宍戶、各遵所奉

諭旨、公會會議、酌加條款、所有議定各條、開列於左

御筆批准、於三個月限內、在
大清國都中互換

第一款
兩國所有與各通商國已定條約內載予通商人民便益各事、兩國人民、亦莫不同獲其美、嗣後、兩國與各國加有別項利益之處、兩國人民、亦均霑其惠、不得較各國有彼厚此薄之偏、但此國與他國立有如何施行專章、彼國若欲援他國之益、使其人民同霑、亦應於所議專章一體遵守、其係另有相酬條款、纔予特優者、兩國如欲均霑、當遵守其相酬約條、

第二款

辛未年、兩國所定修好條規、及通商章程各條款、與此次增加條項有相碍者、當照此次增加條項施行
現今所立加約、應由兩國

(別紙丙號)

○憑單擬稿

兩國通商事宜、有與他通商各國隨時變通之處、彼此預為言明、嗣後、此國有將與他各國現行條約內管理商民、查辦犯案各款、暨海關稅則更行酌改、俟與他各國訂定後、再行彼此酌議、因此預立憑單、畫押為據

(別紙丁號)

○附單稿

一

大清國應派員以 光緒 七年正月、到八重山嶋地方、與 明治十四年二月

大日本國所派官辦、各呈示憑據、將宮古八重山群島土地人民、一併交受、

一 宮古八重山群島民人、在交付之際、

大日本國官辦應先期加意戒飭曉諭、使其安分、以免紛擾、既交付之後、

兩界民人、各遵其國法例、不互相干犯

(別紙戊號)

○照覆

十月十二日節略ヲ以テ彼レノ十月十日ノ照會ニ答ヘタルニ彼
レ照覆ノ文体ヲ望ムヲ以テ節略ヲ照覆ニ改ム

前接准

貴王大臣照會、內稱兩月以來、已商定大致、擬加約條、并另立憑單、彼此意見相同、在宮古八重山所有辦法、先行聲明、以免將來滋議、中國用意所在、應請 貴大臣、轉報 貴外務卿迅賜答復等因、惟本大臣奉辦理之

旨以來、一意希圖保全大局、與

貴王大臣衷情既熟、兩國痛癢之處、互相體悉、可以斟酌了事、若將

196

P.V.M 10 921

貴王大臣所稱逕行、轉報我外務大臣、本大臣或恐辦法未成、彼此再提出前論之不免也、所以本大臣前日謂待定議畫押之後、徐行照會、仍應請示本國也、

貴王大臣或未察本大臣之意耳、

貴王大臣前次節略有二島設立君長、由

中國主持等語、本大臣謂二島已歸于

貴國之後、以二島之人、置二島之君長、不過以

貴國之人、經理

貴國之土地我國不相干預、此則可以先行聲明、不復須轉報本國也、今

貴王大臣之意、如在得我國編籍之人、以爲二島之君長者、我國理不得不相涉、假使我國交付

197

P.V.M 10 922

貴王大臣意中之人、以爲
貴國置立君長之地、是卽在我國、一面廢琉球、一面立琉球、自相矛盾、
不成体面、以此轉報本國、本大臣決知其不便了局也、深望
貴王大臣、更平心商量、務期妥辦、兩國之慶、實在于此矣、

加 約 說 明

井 上 毅 謹 草

清國咸豐八年（我安政五年）戰敗ノ餘英佛兩國ノ爲ニ劫制セラレ天津
ニ於テ條約ヲ結ヒ始メテ外國人ノ内地ニ通商スルヲ許セシヨリ米俄等
爾以下ノ國共ニ條約ニ於テ均沾ノ條ヲ設ケ以テ英佛ト均シク内地通商
ノ利益ニ沾フタリ然ルニ明治四年我カ伊達大使ノ清國ノ全權李鴻章ト
新ニ條約ヲ結フニ當テ我レヨリハ他ノ各國ト同様ナルベキコトヲ要求
シタリト雖モ彼レ峻拒シテ承認セズ其辭トスル所ハ云内地通商ノ條ハ
原來洋人ニ威逼セラレ止ムヲ得ズシテ承允スル所ニシテ後日條約改定
ノ節ヲ待テ停止セント欲スル所ナリ且兩國ヲ比較スルニ清人ハ日本ニ
於テ僅ニ十里内ニ遊歩スルコトヲ得ルノミ日本人ハ縱令内地ニ通商ス

ルヲ得ズトモ亦清國ノ全地ニ遊歴スルコトヲ得ベシ是レ已ニ清國ノ損讓スル所ナリ到底兩國ハ一帶ノ海ヲ隔テ互相往來スベキヲ以テ西洋各國ノ來ルコト有テ往クコト無キ者ト同クスベカラズ云々ノ旨ヲ主張シタリ此時伊達大使ハ彼レノ固執一朝ニ説破シ難キヲ以テ姑ク其議ヲ認メ遂ニ通商章程第十四十五款ニ於テ日本ノ商民ハ内地ニ通商スルヲ許サズ違犯スル者ハ其貨物ヲ沒入スベシトノ明文ヲ掲載スルニ至レリ

各國ノ清國ニ於ケルハ皆内地ニ通商スルヲ得テ獨リ日本ノミ其便利ニ均沾スルコトヲ得ザルハ交際上ニ於テ我國ノ榮譽ヲ汚損スルニ足ルノミナラズ實際貿易上ノ障害亦少小ナラズ西洋商民ハ特ニ自ラ内地諸部ニ入り外貨ヲ賣リ内貨ヲ買フノミナラズ又清國商民ニ托シ洋

貨ヲ運スルニ洋商ノ名ヲ以テシ以テ内地厘金ノ厚稅ヲ免ルルノ便ヲ得是レニ反シ日本商民ハ已ニ内地ニ運賣スル事ヲ得ザル故ニ又從テ日本ノ貨物ハ内地ノ貨物ト同ク厘金ノ厚稅ヲ課セラレ甚シキハ或ハ二重ノ稅ヲ課セララルニ至ル 今年八月津枝洋行ノ運賣セル藍玉ノ送ヲ課シ 西洋貨物ハ稅ヲ免ルル故ニ其價モ亦廉ナルコトヲ得我國ノ貨物ハ重稅ヲ負フ故ニ其價モ亦不廉ナラザルコトヲ得ズ是レ我國ノ商民ハ永久清國ニ於テハ他ノ各國商民ト市場ニ競争スルコトヲ得ザル下流ノ位置ニ居ルコトヲ免レズシテ其結果ハ遂ニ我國ノ富源ニ重大ナル不利ヲ與フルニ至ルハ理ノ必然ナリ

總テ之ヲ論スルニ辛未年日清條約ノ精神ハ專ラ兩國ノ間毎事兩面通行ヲ主トシテ他ノ各國ト交際及通商ノ關係如何ト云ニ拘ラズ故ニ故

意ニ均沾ノ條ヲ條約中ニ闕如シテ以テ我國ニ偏薄ナルノ不幸ヲ與ヘタリ此ノ兩面通行ノ條約ノ精神ヲ一變シテ易フルニ各國均沾ノ主義ヲ以テスルコト能ハザレバ我國ハ獨リ現在ノ障害ヲ被ムルノミナラズ將來永遠ニ於テ清國ハ他ノ各國ニ何等ノ便益ヲ與フルモ我國ハ舊ニ依テ範圍ノ外ニ立チ各國ト併行スルコト能ハザルベシ

故ニ今度ノ増加條約ニ於テ均沾ノ一條ヲ設ケ及辛未條約ノ此條ト抵觸スル者ヲ廢棄シタルハ設クル所一二條ニ過キズト雖モ其舊條約ノ精神ヲ一變シテ以テ各國ト併行ノ列ニ入り内地通商ノ利ヲ獲テ以テ將來永遠ノ大益ヲ占メタル者ナリ唯タ條約ノ文ハ例ニ依リ兩國云々ヲ以テ言ヲ立テ其實益ヲ指明セザルニ似タルヲ以テ茲ニ謹テ辛未以來ノ沿革ヲ説明ス

附 厘 金 解

清國長髮賊ノ亂アリシ以來地方兵備費用ノ爲ニ厘金稅法ヲ設ケタリ其法ハ運送ノ道路ニ到ル所稅關ヲ置キ 大抵每五里ニ一小稅關アリ彼五里ハ我一里ノ七分以テ商民ノ運貨ヲ抽稅ス其稅法ノ煩苛ニシテ加フルニノ五有奇

稅吏ノ私橫ナルコト清國商民ノ深ク困ム所ナリ然ルニ西洋各國ハ從前天津條約ニ據リ内地ニ通商スルコトヲ得テ而シテ又別ニ子口半稅法ヲ設ケテ以テ厘金稅ノ煩ヲ免レタリ子口半稅法トハ内地ニ貨物ヲ運送スルニ其開口ノ稅關ニ於テ海關稅ノ半額ヲ納完スレハ例、海關稅銀一分ノ物品ナレハ子口稅五厘厘金納稅免狀ヲ得テ以テ内地ニ至リ遠近ニ拘ラス厘金ノ煩重ヲ免ルル事ヲ得又清國ノ產物ヲ内地ニ於テ買取ルモ此例ニ同シク開口地ニ運

ヒ至ルノ最終ノ子口ニ於テ半税ヲ納メ而シテ沿途ノ厘税ヲ免ル
ル事ヲ得 子口トハ海關ニ非サル
内地ノ小税關ナリ

憑單說明

辛未ノ年即明治四年ニ訂定セル日清條約ハ其通商章程第三十二款ニ互
換ノ年ヨリ起リ、十年ヲ以テ重修酌改ノ期限トスル旨ヲ掲ケ而シテ批
准互換ヲ行ヒタルハ明治六年三月ニ在リシヲ以テ乃チ六年ヨリ起算シ
明治十五年迄ハ仍ホ期限未滿ノ中ニ在リ十六年ニ至テ始メテ改正スル
コトヲ得ヘキナリ

現ニ今、我國各國ト條約ヲ改正スルノ機會ニ際シ清國若シ獨リ現行條
約ノ期限ヲ據守シ改正ヲ承諾セサルトキハ他ノ各國ト改約全成ニ至ル
トモ清國一國ノ爲ニ牽掣セラレ、第一ニハ各國其條約ヲ改メタルニ拘
ラスシテ清國ニ猶存スル所ノ利益ニ均沾シテ以テ新定ノ條款ヲ履行セ
サルヲ得ルトキハ是レ我カ條約改正ハ明治十六年ニ至ル迄ノ間ハ徒ニ

内改正ノ事ヲ要求シタルニ彼レ初メニ異議アリト雖モ終ニ二件トモニ之ヲ承諾シテ以テ好意ヲ表シ我カ爲ニ永遠ノ便益ヲ與ヘ及ヒ我カ條約改正ノ重大ナル機會ヲ贊助シタルハ實ニ我國ノ幸福ナリト云ヘシ

空文タルコトヲ免レサラントス第二ニハ新定條約ニ依リ輸入物ニ課税スルニ當リ清國ノ物貨ハ仍ホ舊約ニ從ヒ輕税ニ止マルトキハ各國商民ト清國商民トノ間ニ假托冒濫ノ姦行ハレ、漏孔百出シテ窮詰スヘキ無キニ至ラントス

此ノ二ツノ障害アルヲ以テ此際ニ當リ我國ハ清國政府ニ向テ現行條約ノ期限ニ拘ラス限内ニ改正ヲ承諾スル事ヲ求ムルコト實ニ緊要ノ事タルニ只タ彼國ノ國風トシテ一タヒ批准ヲ經タル者ハ何等ノ事情ニモ拘ラス敢テ變動セサルノ故ニ已ニ明治十年ニ森公使ヨリ數條ノ酌改ヲ求メタルモ李鴻章ハ年期内ニ於テハ斷然改正スルコト能ハストノ一言ヲ以テ決答シタリ

然ルニ今度琉球一案商議ノ機會ヲ以テ我レヨリ増加條約ノ事ト并ニ限

内信

137

○ 宍戸公使ヨリ井上外務卿宛

明治十三年十一月十日

(總署ヨリ調印ノ事申越ササルニ付催促ノ件)

彌御清適御奉職可被成奉慶賀候扱井上毅氏事ハ過ル三日上海發船ノ筈ニ付多分頃日ハ東京へ歸着ニテ當地委細ノ情況逐一御承知可相成ト奉推察候扱總理衙門調印ノ一件ハ奏聞彼是手間取候ニ付十日餘猶豫イタシ吳度トノ事ニ付當月三日迄ハ催促イタシ不申見合セ候ヘトモ爲何事モ不申越候ニ付過ル四日石崎書記生ヲ總署迄サシ遣總辦官へ相對ノ上最前十日程猶豫ノ御申聞^左ニ相任セ置候處調印早々相運不申候テハ右本書エ批准相願候タメ本國エノ往返モ日數相懸リ候間急速御取計有之度段口上

208

P.V.M 10 933

209

ヲ以爲申入候處御尤ノ義ニ付イツレ堂憲エ相伺早速返答可及トノ事ニ候處七日午後總辦ヨリ石崎書記生迄以書中條約一件具奏イタシ置候ヘトモ未タ准许無之准许相濟次第此方ヨリ可申入トノ返答即別紙封機密信ニテ申上候趣ニ御座候只今迄ハ爲何様子モ不申越ニ付イカカ哉トハ存候ヘトモ總署大臣等ニオキテ追々應接并ニ節略ニテモ御覽被成置候^{懸合}通リノ^{懸合}ニテ一旦決定イタル事ニ付多分右一條中變イタシ候様ノ事ハ有之間敷同人等ノ面目モ不相立事ニ付タトヘ他ヨリハ議論有之候テモ總署諸人ニオキテハ多分利害得失ヲ具シ辨論イタシ可申事ト被存候シカシ一兩日モ相過候ヘハ又々催促イタシ試候覺悟ニ御座候俄國一件モ未タ着落ノ模様ニモ無之(支那ニテ銃器ヲ買入人數ヲ出シ^候ニ付見ルヘシ)彼是總署ニテモ多忙ニ可有之ト(一昨日八日夜米公使「アングル」氏夜會ニ赴キシ

P.V.M 10 934

節同國條約委員ノ談話ニ米國ノ條約一件モ何卒閉河迄ニハ爲相濟申度トノ事ニモ有之總署ノ多忙モ隨分被思遣候事ト存候被相察申候井上毅氏ヘモ何卒右御傳被成置被下度先ハ前條詳報申上置度如此御座候也頓首

明治十三年十一月十日

井上 啓 様

内 啓

P.V.M 10 935

128

機密信第四九號

明治十三年十一月十八日

○大戸公使ヨリ井上外務卿宛
(條約案ハ南北洋大臣ノ意見ヲ徵スヘントノ上諭アリ頓坐ノ件)

以機密信致啓上候約書調印ノ儀此程中ヨリ度々催促及候趣ハ追々申上置候通ニ有之候處昨十七日至リ突然總辦葉統相外壹人公館エ相越シ田邊書記官エ面會ノ上別紙寫ノ通照會書差出シ昨日上諭ヲ奉候ニ付不取敢如此候云々申述候卑職該案ニ付御委任ヲ奉候折柄彼方委任ノ官員ト商辦可致旨申入總理事務王大臣一同右委任有之旨返答御座候末追々談判ヲ重ネ既ニ内決ニオヨヒ候後今日ニ至リ右様ノ次第如何ニモ不都合ノ至ニ被存候

P.V.M 10 936

間早速今日以啓文明十九日面會ノ儀申入候面會ノ上ハ充分論駁可及候得共彼亦上諭ト申處ニ據リ埒明候運ニハ急速オヨヒ兼可申候餘リニ侮弄ヲ極候様成致方ニテ或ハ中變ノ地ヲ爲候タメニモ可有之哉トモ疑念被致候へ共只今迄ノ景況ニテハ右様ノ惡意モ有之間敷被存其意中探得仕カタク被存候兎ニ角明日面會ノ上ハ右朕兆ヲ窺得候機モ可有之存候猶面談ノ次第後便可申上候得共不取敢此段申上候也

明治十三年十一月十八日

特命全權公使 宍戸 璣

外務卿 井上 馨 殿

P.V.M 10 937

(別紙)

大清欽命總理各國事務王大臣

爲

照會事、光緒六年十月十四日、欽奉

諭旨前據總理各國事務衙門奏擬結琉球一案各摺片、著交

南北洋大臣等妥議具奏、俟覆奏到日、再降諭旨欽此、相應恭錄照會

貴大臣可也、須至照會者、

右 照 會

大日本國欽差全權大臣宍戸

光緒陸年拾月

拾 伍

日

P.V.M 10 938

129

○竹添天津領事ヨリ井上外務卿宛

別格機密信第一號

明治十三年十一月二十日

(清政府ノ中變ハ李鴻章ノ横矢ヲ入レタルモノナラントノ件)

昨十八日宍戸公使ヨリ密信到來并イ印上諭寫ヲ附送相成候ニ付小官ヨリ
 ハ不取敢口印ノ趣ヲ以テ公使ニ申立置候右に上諭ヲ以テ相考候ヘハ清政府
 ハ中變致シタルニ相違無之而シテ其中變ハ李鴻章ヨリ横矢ヲ入レタルモ
 ノト推察被致候何トナレハ我カ辛未ノ條約ハ全ク李鴻章一人ニテ取結ヒ
 李氏ハ十分ノ力ヲ極メテ内地通商ヲ拒絶シタリ然ルニ今日ニ至リ李氏ノ
 手ヲ經スシテ辛未ノ條約ヲ改正增加スルハ總理衙門ノ手抜ケト云ヘシ是
 レ李氏不快ノ一ナルヘシ琉球ノ一案内談トハ乍申小官ヨリ我政府ノ主意

214

P.V.M 10 939

215

ヲ最初李氏ニ申入レ談判ノ端緒ヲ開キ李氏ヨリモ小官ニ囑托セシ要件有
 之然ルニ宍戸公使航清ノ節李氏ノ不在ヲ幸トシ面會無之一直進京シ總署
 ニ向テ疏案ヲ開談ニ相成タリ是レ李氏不快ノ二ナルヘシ加フルニ小官ハ
 李氏トノ内談ヲ中止シ進京シテ陰ニ公使ノ談判ヲ贊助セシヲ以テ李氏ハ
 出シ抜ケニ逢タルノ憤リヲ挾ミ夫故小官ノ留守中へ怒鳴リ込ミ竹添領事
 ハ脱走セリヤ實ニ洋鬼子ノ如ク他ノ間隙ヲ窺イ人ヲ困難ニ陥ラシムル様
 ノ事ヲ爲ス勿レト惡口セリ是レ李氏不快ノ三ナル可シ又「グラント」氏
 ハ全ク清國ニ左袒セリト李氏ハ心得居候處日本ニ渡航ノ後却テ日本ニ左
 袒セシ姿有ルヲ以テ大ニ憤懣ヲ懷キタリ仍テハ印別紙ノ通り「グラント」
 氏ヲ怒罵スル所以ニシテ小官就任ノ時李氏ニ向ヒ「グラント」氏モ米國
 公使モ決シテ三分說ヲ唱ヘタル事ハ無之段言明候節反復常ナシ小人ノ恒

P.V.M 10 940

態ト答ヘタル旨意ト大略符合致シ候是レ李氏不快ノ四ナルヘシ右ノ通り
 李氏ハ不快ノ上ニ不快ヲ重ネ憤怒ノ餘リ日本ニ向テハ手負獅子ノ荒レ廻
 ル如ク必ス其ノ爪牙ヲ試ミントスルヤ疑ナシ茲ニ一證ト爲スヘキ者有リ
 小官就任即下ハ海關道臺ノ懇親尤甚シキノミナラス製造局ノ道臺其他李
 氏ニ出入スル官員多クハ彼レヨリ交ヲ求メ往來ヲ通シ候處近日ニ至リ候
 テハ皆來往ヲ避クルノ色アリ是レ李氏ノ憤怒ヲ聞見スルニ由ルナルヘシ
 仍テ南北洋大臣等ニ下議セシムルノ上諭ハ全ク李氏横矢ヲ入レタルヨリ
 起リ候事ト被察候折角都合能繼リ候疏案再ヒ破壞ニ歸シ候ハ實ニ遺憾ニ
 不堪候此上ハ只々廟議ノ決定スル所ヲ速ニ奉伺度存候

第一條

既ニ上諭ヲ以テ相達シ候以上ハ清政府ニ於テハ上諭ヲ取り消シ候儀萬々

出來中間敷候就テハ我ヨリ總理衙門ニ向テ何故ニ委任ヲ奉シタル諸大臣
 ノ議定セシ草案ヲ更ニ南北洋大臣ニ付シテ妥議セシムルノ命アルヤ畢竟
 委任ノ諸大臣上旨ヲ違背セラレタルニ由ルナルヘシトノ論旨ヲ以テ總署
 ノ大臣ニ迫リ右大臣ヲシテ悉ク辭職セシムル迄論シ詰メ候方可然哉

第二條

清政府ハ特ニ委員ヲ欽命シテ疏案ヲ商議セシメ其決議セシ條約案ヲ擬定
 スルニ及テ其定案ヲ下議ニ付スルハ畢竟變訴ノ術ニ出タルモノニシテ我
 カ全權公使ヲ侮弄シ我政府ヲ輕蔑スルモノ也ト主張シ以テ和議ヲ破ル可
 キ哉

第三條

或ハ平穩ニ歸スルヲ目的トシ姑ク之ヲ不問ニ付シ南北洋大臣具奏ノ上ニ

テ彼ヨリ照會スルノ日迄相待チ其上ニテ我レヨリ彼レノ失體ト變詐トヲ責メ以後琉球ノ事ニ付テハ清政府ヨリ一言半句ヲ容レサルヘシト明言セシムルヲ以テ其ノ局ヲ了スヘキ哉

右ノ件々ニ付廟議ノ決スル所速ニ御示教被下候様奉願候

愚考ニテハ第三條ハ餘リ弱ニ過キ且ツ其ノ成效モ亦期ス可カラス第一第二條ハ到底相聯結スルモノニシテ總署ノ大臣ヲ辭職セシムル事能ハサル時ハ即チ其ノ罪ヲ責メ和好ヲ破ラサルヲ得ス

抑兩國戰爭ニ出ルハ決シテ好ム所ニ非スト雖トモ之ヲ熟考スレハ寧ロ戰ニ出ツルニ如カサルニ似タリ支那人ハ力ヲ以テ伏シ易シ理ヲ以テ争ヒ難シ既ニ琉案妥協ニ至ラサル以上ハ向後交際上猜疑ノ念ヲ消滅スル能ハスシテ千百年ノ後ニ至ル迄内地通商ノ權ヲ我レニ得ル事能ハス北支那ノ貿

易ハ終ニ旺盛ニ至ルノ目的無シ故ニ今日斷然兵力ヲ用テ之ヲ伏セシメ十分ニ我カ請求ノ點ヲ要取スルノ捷徑ナルニ如カス

更ニ一步ヲ進メテ之ヲ論スルニ魯清ノ形勢方ニ岌々タリ果シテ戰ヲ開クニ於テハ我國ハ其ノ兩間ニ在テ甚タ處置ニ苦シムヘシ徒ニ局外中立ヲ唱ヘ中立ノ實ヲ守ル能ハサル時ハ清國ヨリ我國ヲ怨ムルノ念ハ一層ノ深キヲ加フヘシ故ニ今日ニ在テ斷然彼レノ反覆失體ヲ責メ以テ交ヲ絶ツニ如カス然ル時ハ他日困難ノ地位ニ立ツノ苦シミヲ免カル可シ

今ヤ我國ノ財政困難ナルニ際シ海外ニ戰ヲ開クハ得策ニ非スト雖トモ支那トノ戰ニ於テハ必シモ多分ノ軍備ヲ要セサル可シ我一二ノ軍艦ヲ發シテ以テ陸兵ヲ載セ或ハ臺灣ヲ取り或ハ舟山ヲ奪ヒ其ノ奪取スルニ隨テ陸兵以テ之ヲ守リ軍艦以テ海ニ浮ヘ清船ノ往來ヲ阻遏スルニ於テハ南北支

221

Suangnai, Nov. 28

To Inouye,
Gaimusho, Tokio.

Per last mail I informed you that negotiation for Loo Choo affairs and additional treaty having been settled Sorigamon promised to sign in a few days, but now received from Sorigamon, after my frequent pressing, a letter informing me that the Sorigamon received the Imperial Order to hold the matter still until His Majesty hears the opinion of the Southern and Northern Commercial Ministers. I therefore held a conference about it with Sorigamon yesterday. Details by mail.

Peking, 21st.

Shishido.

P.V.M 10 946

電信

130

○ 宍戸公使ヨリ井上外務卿宛

(南北洋大臣ノ意見ヲ徴スヘキ上諭アリタル件)

上海 明治十三年十一月二十八日 發
東京 同 年同月同日 受

220

那ノ航路中絶シテ清國ハ終ニ其ノ困難ニ耐ユル事能ハサルヘシ其内ニ魯國如シ戰ヲ開カハ之ト連合シテ支那ノ要地ヲ襲撃シ如シ魯國和ニ出ツル時ハ我レノ獨力猶以テ彼レノ膽ヲ破ルニ足ル到底清政府ヨリ和ヲ請ハ必然ナリ是ノ時ニ當リ内地通商等ノ要件ヲ請求セハ意ノ如ク之ヲ得サル事ナシ夫レ戰ハ危事ナリ支那ト戰ハ危事ニ非ラス和ハ美譽ナリ支那ト和スルハ戰ヲ以テ和スルノ利ナルニ如カス
右ハ粗暴ノ論ニ可有之候ヘ共愚見ノ儘録上シ以テ御指揮ヲ奉仰候也

右密件如此ニ御座候

明治十三年十一月二十日

井上外務卿殿

(別紙省略)

竹添進一郎

P.V.M 10 945

○井上外務卿ヨリ太政大臣宛

明治十三年十一月三十日

(宍戸公使へ御委任狀下付方ノ件)

琉球事件及日清現行條約增加條款ニ署名調印シ且之ヲ交換ノ全權在清宍
戸公使へ御委任ノ御沙汰有之度^依テ別紙御委任狀案取調相伺^候條案文
ノ如ニテ可然候ハハ本書御下渡相成度此段上申候也

明治十三年十一月三十日出

(別紙)

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本皇帝此書ヲ見ル有衆ニ宣示
ス

朕日清兩國ノ間ニ存在スル友誼ヲ暢達擴張セン事ヲ希フニ因リ今般琉球
事件及ヒ日清現行條約增加條款ノ事ニ關シ駐清特命全權公使宍戸璣ノ忠
誠明敏ナルヲ信シ命スルニ全權ノ任ヲ以テシ清國皇帝ヨリ均シク正當ナ
ル全權ノ委任ヲ受タル大臣ト商議決定シ文書條約ニ署名調印シ且之ヲ交
換スルノ全權ヲ付與ス其立約條款ニ掲載スル旨趣ハ朕其善良ナルヲ認メ
之ヲ批准スヘシ

上文ノ意ヲ保證センカ爲メ神武天皇即位紀元二千五百四十年明治十三年

六月二十九日東京宮中ニ於テ親ヲ名ヲ署シ國璽ヲ鈐セシム
御名 國璽

奉 勅

外務卿 井 上 馨 印

224

P.V.M 10 949

132 ○井上外務卿ヨリ宍戸公使宛
機密信第三八號 明治十三年十二月一日 付
(宍戸公使へ内訓狀送付ニ關スル件)

225

琉球事件ニ付テハ過日井上毅歸朝以後打絶其地ヨリノ音信無之加約調印
一條様子如何ト相考居候折柄去月二十八日夜貴君ヨリ北京十一月二十一
日附暗號電信到着加約調印ノ事再三御催促ノ末總理衙門ヨリ書翰ヲ以テ
該事件ハ今一應南北洋通商大臣ノ意見ヲ諮詢スル迄一時停止ス可キ旨上
諭ヲ蒙リタリト申來リタルヨリ當時更ニ掛合中トノ事御申越ノ趣承知致
シ依テ我政府ニ於テモ篤ト廟議ヲ盡シ今度更ニ御委任狀并ニ内訓狀ヲ貴
君ニ御渡シ申候間之ニ由テ我政府ノ主意ヲ體認セラレ臨機適當ノ御所置

P.V.M 10 950



用ヒ候等書中ヲ以テ詳悉シ得ヘキモノニ無之候因テ其爲メ特ニ井上毅ヲ
其地ニ派遣相成候ニ付委細ハ同人ヨリ御聞取ノ上事宜御措辨可被成候此
段申進候也

有之度候實ニ此度清政府ノ所業ノ如キハ無信無義無法トモ申ス可キモノ
ニテ意外千萬ノ事ニ候依テ貴君ニ於テハ訓狀ノ主意ニ從ヒ先ツ清政府ニ
迫ルニ約ヲ踐テ約書ニ調印セン事ヲ以テシ否ラサレハ我政府并ニ使臣ノ
面目ヲ傷フ事是アリ甚シキハナク故ニ我ニ與フルニ恥辱ヲ以テスルモノ
ナリトノ事ヲ飽マテ辨論難詰被致充分ニ彼ヲ脅制スルノ手段ニ出テ候様
可被致彼レ若シ頑陋ニシテ遂ニ我言フ所ニ服セサルトキハ速ニ此談判ヲ
停止シ内訓狀末段ノ旨意ニ基キ一時歸國ノ命ヲ受ケタル旨ヲ清政府へ通
知シ公使^館領事務ハ書記官ニ代理被命斷然發途可被致候乍併是レ以テ兩國
ノ交誼ヲ斷絶スルノ本意ニ無之候間陽ニハ溫和ノ音容ヲ示シ陰ニハ戰和
ノ機此ニ存スルノ意ヲ表シ彼ヲシテ到底悟ル所アラシムルノ方略ヲ用ヒ
候事尤肝要ニ有之候右貴君ノ進止及ヒ最後談判ノ事宜^後機^臨圖^嶺斷ノ手段ヲ

六戸公使へ内訓状案

琉球一件并増加條約ノ件ニ就キ十月二十一日ノ談判ニ於テ清國總理衙門ヨリ三通ノ條約案ヲ提出シ不日調印スヘキ旨ヲ約シタル事狀ハ既ニ閣下ノ電信并報告書及井上毅ノ復命ニ依リ之ヲ領悉セリ然ル處一昨二十八日ノ夜十一月二十一日附北京發閣下ヨリノ電信ヲ接スルニ曰ク

先便ヲ以テ報告セル琉球一件及追加條約ノ談判決定シ、不日調印ノ儀、總理衙門ト約シ置キシ處、爾來數回ノ書面ヲ以テ催促ノ末、彼ヨリノ返答ニ皇帝ヨリハ南北洋通商大臣ノ意見ヲ上奏スル迄ハ此儘ニ差置クヘシトノ上諭ヲ奉シタル趣ヲ以テセリト

右ノ報知ニ據ルトキハ清國政府ハ總理衙門ノ叶議セル所、并ニ其提出セ

ル條約案ヲ翻異シテ更ニ何等ノ異議ヲ主張スルノ意ヲ包藏スルカ或ハ言ヲ左右ニ托シ故意ニ遷延シテ以テ清魯葛藤ノ了局ヲ待タントスルノ詐謀アルカモ未タ料ルヘカラス

元來閣下ト總理衙門トノ談判ハ彼レヨリ始メ美國前統領信内所稱情事ヲ

照シテ次第ニ辨理センコトヲ願ヒ照會 第四又貴國現ニ何員ヲ派シテ前來商辨

スルヤヲ尋問セルニ因リ照會 第五前統領領克蘭氏ノ意見ハ兩國ノ特派大員ヲ以

テ辨法ヲ商定スルニ在ルニ從ヒ我政府ハ特ニ此一案ヲ以テ閣下ニ委任シ

公使ヲ以テ特派大員ノ任ニ當ラシメ而シテ總理衙門ニハ明カニ商辨ノ事

宜ヲ以テ之ヲ閣下ニ任スル旨ヲ通知シタリ照會 第五閣下ヨリハ又其委任ヲ承

ケタル由ヲ總理衙門ニ報知シ且ツ清國ハ何員ヲ派スルヤ又何地方ニ於テ

會同スルヤヲ尋問シタリシニ彼レヨリハ光緒六年六月三十日付ヲ以テ欽

奉諭旨著該衙門王大臣會同妥商辦理欽此、云々ノ旨ヲ照會ヲ以テ本職ニ報シ且閣下ニモ報知シタリ右著總理衙門辦理スルノ文字ハ即チ清國皇帝ノ諭旨ニシテ總理衙門ヲ以テ我カ全權委員ニ對スル特派大員ノ委任ニ當テタルノ證憑ニシテ總理衙門ノ諸王大臣ハ正ニ此一案ヲ辦理スル爲ノ全權ヲ有シタル者タル事疑ナシ

既ニ克蘭氏ノ意見ニ依リ双方全權ノ大臣辦理ノ事ヲ委任セラレ歷次往復ノ末彼レヨリハ照會ノ明文ヲ以テ閣下ニ宛テ双方意見相同ノ意ヲ表シ又啓文ヲ以テ本王大臣已ニ商得辦法ノ大略十月十九日ト云ヒ而シテ十月二十一日ニ至リ彼レヨリ三通ノ條約草案ヲ提出シテ此草案ニ向テ我カ同意ヲ促カシ若シ異議アルコト無ケレハ双方調印シテ此一案ノ了局ニ至ルヘキ旨ヲ述ヘタリ此時ニ方リ右三通ノ條約案ハ我カ政府ノ廟議ノ在ル所ト大段

異同ナキヲ以テ即時同意ヲ表シ更ニ日ヲ期シテ双方調印ノ式ヲ行ヒ以テ全權委任ノ大事ヲ終局スルヲ望ムノ外他事ナカリシ

然ルニ今貴報ニ及云フカ如ク彼レ前條預約ノ後調印ヲ遷延シ終ニ上諭南北通商大臣ノ意見ヲ待ツ云々ヲ答ヘタルハ公法上ニ於テ自カラ全權ノ任ヲ敗ルノミナラス且ツ自カラ前言ヲ食ミ反覆ノ舉動タルコトヲ免レサルヘシ

如此反覆ノ舉動ト及遷延ノ詐術トハ清國政府常用ノ手段ニシテ目前其近例ヲ見ルコト少カラス今我レヨリ之ヲ緩慢ニ付スルカ又ハ徒ラニ文字口舌ノ間ニ爭フトキハ終ニ時日ヲ曠久シテ結局ノ期ヲ見難キニ至ランモ亦知ルヘカラス

因テハ左ノ大意ヲ以テ急ニ總理衙門王大臣ヲ詰責セラルヘシ

兩國全權ノ特任ヲ受ケタル大臣ハ意見相同ノ後、即チ調印シ、調印
 已ニ終テ、始メテ批准ヲ請フヘキノ理ニシテ調印ノ前ニ上諭ヲ請ヒ
 及南北洋通商大臣ノ意見ヲ待ツノ要用ナシ若シ總理衙門諸大臣ハ十
 分ノ全權ナキ者ナラハ最初ニ何故ニ克蘭氏ノ信内ニ稱スル所ヲ照シ
 辨理スト云ヒ及著該衙門王大臣辨理云々ノ上諭ヲ承ケタリシ本大臣
 ハ已ニ我政府ノ全權ノ委任ヲ得テ前日上諭ヲ欽奉シタル貴國ノ大臣
 ト商辨シ意見相同シク幸ニ提出サレタル條約案ヲモ得タル上ハ本大
 臣ノ面目ヲ以テ飽マテモ前日ノ事ヲ保守シ當然ノ全權アル總理衙門
 王大臣ノ言ヲ信用シテ敢テ此事ノ委任ニ關係ナキ南北洋通商大臣ノ
 意見ニ拘ハルコトヲ欲セス若又貴政府ハ總理衙門ニ此辨理ノ全權ヲ
 與ヘストナラハ是レ今日ニ至リ前日ノ照會及啓文ト全ク相反スルノ

言ヲ聞ク者ニシテ我政府ト及我全權大臣ハ貴政府ノ言フ所前後相反
 スルカ爲ニ意外ノ~~歎~~キヲ被ムリ本大臣ハ幾ント和好ヲ保全スル爲ノ
 全權大臣ノ委任ノ面目ヲ保ツコト能ハサルニ迫レル旨ヲ以テセラル
 ヘシ

右ノ趣意ハ事局此ニ至ルノ際ハ公法上ニ於テ當然ノ事理タルヲ信スルノ
 ミナラス且ツ激切痛快ノ論說ヲ用フルニ非サレハ清國政府ノ緩慢詐譎ヲ
 喝破スルニ足ラス故ニ閣下談論ノ際最モ此ニ注意セラレン事ヲ要スルナ
 リ

若シ又前陳ノ論說ニ對シ彼レ仍ホ曖昧ノ答議ヲ爲シ遷延日ヲ移スノ色ア
 ルトキハ再ヒ口舌ヲ費スコトヲ止メ退テ初議ニ返リ我レハ靜位ニ立チ彼
 レヲシテ動位ニ居ラシメ彼レ増加條約ニ異議アルトキハ我レモ亦二島ヲ

特命全權公使 宍戸 璣 殿

外務卿 井上 馨

P.V.M 10 960

明治十三年十一月三十日

割與スルコトヲ爲サス却テ琉球ノ爭議ヲ擧ケテ我カ全勝ト爲スニ止トメ
而シテ我ハ但タ優游餘地ヲ示シ我カ政府ヨリノ内諭アリシ趣ヲ披露シテ
一旦本國ニ歸休ノタメ暇ヲ告ケテ北京ヲ退去セラルヘシ但シ公使ノ事務
代理セ更ニ後日ノ結局ニ至テハ彼レヨリ再ヒ照會ヲ以テ我カ政府ニ要求
シムスル所アルニ非サレハ我レヨリハ肯テ先ンシテ辨理ヲ求メス而シテ其臨
機ノ事宜ハ彼レノ舉動ニ應シ以テ徐ロニ處置スル所アラントスルナリ
以上述ル所ハ書而ヲ以テ其委曲ヲ悉ス事能ハサル可シト思考シ更ニ井上
毅ヲ派遣セラレ廟議ノ在ノ所ヲ閣下ヘ傳ヘシムルニ付閣下之ニ由テ須ラ
ク前述ノ旨趣ヲ体セラレ緩急其機ニ投シ操從其宜ヲ得ルニ盡力セラルヘ
シ

P.V.M 10 959

237

外務卿 井上 馨 殿

P.V.M 10 962

236

以機密信致啓上候先信申上候通本月十七日總署ヨリノ照會ニ對シ早速而
 談ノ儀申入候處十九日ハ差支ノ趣斷越候間直ニ其翌日即二十日ヲ以而談
 致候上昨二十三日照覆オヨヒ置候右ニ付テハ書面上何分盡意兼候事情モ
 有之田邊書記官立歸リ歸朝爲致委曲而陳爲及候積即明後二十六日當所發
 足爲致候條萬同人口頭ヨリ御聞取被下度奉存候
 右申上度如斯候也

明治十三年十一月二十四日

特命全權公使 宍 戸

璣

P.V.M 10 961

機密信第五〇號

134

○宍戸公使ヨリ井上外務卿宛

明治十三年十一月二十四日

(十一月二十日總署大臣ト面談ノ件)

(別紙)

十一月二十日於總理衙門六戶公使對話筆記

總理衙門大臣 沈桂芬 麟書 王文韶 崇禮 夏家鎬

石崎次郎太 通譯 田邊太一筆記

中田 敬義

一應挨拶了

沈 先日差出候照會ハ御覽被成候哉

公使 一覽致候今日後^参衙候ハ全ク右御照會ニ付御趣意承り度ヨリノ事ニ候一体球案辦理ニ付テハ先達テ以來各大臣ニモ好意ヲ以テ御相談相成候事ト存シ此方ニモ好意ヲ以テ萬端御相談申候事ニ候處此度ノ御照會ハ甚不得其意次第各大臣方ニハ本大臣ニ對シ御好意ハ無之事ト存候

P.V.M 10 963

沈 決シテ不好意思ト申ニハ無之双方協議ノ上上奏ヲ經候ハ此方當然ノ

公使 手順ニテ右ニ付以照會申進候通り上諭ヲ奉候得共辦法ニ相違モ無之御相談置候處ニ差異モ無之只聊カ月日ヲ延稽候迄ニ可有之候

公使 左候得ハ此程中御相談及ヒ置候辦法ニ付後來一定相違無之段御保證相成候哉

沈 保證致候事ハ出來不申南北洋大臣等議奏ノ上上意次第ノ事ニ候

公使 即チ各大臣ニハ好意ヲ不被抱ト申處ニ候

沈 是迄御相談及ヒ置候處ニ相違モ有之間敷候得共此一案ハ關係頗ル重大ニ付其事ヲ鄭重ニ被致候上意ト被存候南北洋大臣ハ外國通商取扱居候事故加約ニ付意見ヲ被問候事且ツ福建邊地方官ニハ兩島ノ事情モ委敷承知可致ニ付其邊モ下問相成候事ニ候

P.V.M 10 964

公使 各大臣方御不好意思ト申ハ即チ其事ニ候本大臣當初本地ニ駐在被命候折ハ未ダ球案ニ付辦理ノ委任ヲ不奉候故職掌上該案ニ付一二御談話及ヒ候事ハ有之候得共敢テ專對不致ハ御承知ノ通ニ候其後委任ノ命ヲ奉シ候ニ付貴政府於テ御委任ノ方ニ御談判及ヒ度旨照會候處十數日ノ後貴衙門王爺初メ御一同ニテ該案辦理御委任ノ旨上諭ヲ被奉候トノ事御報明有之全体貴衙門ニハ總理各國事務ノ御職掌ニ有之上ハ縱令別段御委任無之共右等辦理ノ權ハ可有之筈ノ處球案ニ付テハ特ニ委任ノ諭旨ヲ被奉候上ハ各大臣ニハ充分ノ全權ヲ被有候事ト相信シ此迄無伏藏商辦致シ既ニ成説有之御互ニ不日調印可致ト申約束迄致候末俄ニ兩洋大臣等ニ御下問ノ上決定可相成諭旨ヲ被奉候トノ儀ハ實ニ駭異ノ至リ候双方共既ニ委任ヲ奉候

上ハ其委任ノ旨ヲ体シ談判ノ上互ニ妥協ニ及候者ハ即チ其委任ノ權ヲ以テ互ニ調印致シ可然儀ニテ其上ニテ双方君上ノ意思次第批准ノ有無ハ可有之候得共未タ調印ニ至ラズ兩洋大臣等ニ議奏セシムルトノ事ハ總理事務ノ御職掌殊ニ今般該案辦理委任ヲ被奉候所ニ對シ各大臣方ノ御面目ニモ拘リ候儀ト存候然ルヲ右様御報明有之候ハ全ク談判中變セシムヘキ御見込ニテ即チ御不好意思ニ出候事ト心得候

沈 御尤ニ候乍去此方ニテ從來結約調印ニ付兩様ノ例現有之外國ニ派遣被致候欽差又ハ外省即天津上海等ニテ談判候節ハ其全權委任ノ者議協次第調印致シ然ル後ニ上奏批准ヲ請候手續ニテ今年伯西兒公使ト李鴻章ト議約候モ其通りニ候然ルニ本衙門ニテ取扱候節ハ

公使

双方議協一致ノ後一應内奏ヲ經允許ヲ得候後調印致候仕來ニテ所謂批准ト申モノモ爾後全クノ手數迄ニ御座候當年獨逸增約及西班牙米利堅等トノ條約皆此例ニ候況ヤ貴國トノ關係殊ニ重大ニ付南洋大臣等ノ議奏ヲ待候都合ニ相成候ハ無據事ニ候兩島ノ景況杯モ南邊地方官ニハ取調相届可申筋ニ付下問相成候事ニモ可有之候貴衙門ニテ被取扱候節ハ從來ヨリ仕來有之外方ノ例ト相違有之トノ儀ハ一應相分リ候得共貴國於テ必右様ノ手續可有之事ニ候得バ先頃球案談決ノ際調印ノ儀ハ十日モ相立候者ハ可然トノ御答有之既ニ角迄ノ手數ヲ要候事御承知ニ候ハ十日ト御申聞ハ何等ノ御趣意ニ候哉彼此相考候得バ全ク中變ノ御趣意ヨリ詞ヲ被托候事ト被存候且只今兩島云云御申聞ニ候得共右ハ先達テモ申置候處人ヲ

P.V.M 10 967

沈

差シ履勘セシメラレ候様ノ事御座候テハ甚迷惑ニ候條猶此儀ハ堅ク御斷申置候

成程先頃妥議ニ及候節十日モ立候者バ調印可及段ハ申述候事ニ候得共其節奏聞ヲ經可申旨モ申述置候我ニ於テハ固ヨリ一致談決候上ハ聊他意ハ無之且速ニ了結候所ヲモ望居候事ニ候得共如是諭旨ヲ奉候上ハ不得已次第ニ候兩島ノ儀モ福建邊ニテハ委曲ヲ承知候者モ可有之右等取調モ明白可相成儀ニテ必シモ人ヲ派差候迄ニハ至リ申聞敷候

公使

上諭ニ付固ヨリ彼是ヲ申候事ニハ無之該案ニ付開談已來既ニ三ヶ月ヲ經候間必ス南北洋大臣等ノ意見ヲ被要候事ニ候ハハ右談判中御相談有之候テモ可然且貴衙門ハ專ラ外國事務ヲ御取扱相成候而

P.V.M 10 968

王 沈

己ニモ無之其長タル王爺ハ攝政ノ名義コソ無之トモ政柄ヲ掌握被
致候御方ト承知致候右王爺及各大臣ニシテ既ニ議協及候事ヲ今日
更ニ南北洋大臣等ニ是非トモ御下問相成不申候テハ不相成トハ更
ニ全權ノ甲斐無之如是ニ候ハハ爾後重大ノ事件談判候ハ各大臣ヲ
當テニハ致シ難ク兩皇太后陛下御前へ罷出不申立候テハ不相成ト
存候位ノ儀ニテ如何ニモ奇恠ノ至ニ候右故談判中變ノ地ヲナサレ
候爲メ詞ヲ被托候哉ト疑念致候

王爺ニハ固ヨリ樞機ヲ被掌候得共決テ奏聞ヲ不經獨斷被致候權ハ
無之候既ニ此ク上諭ヲ奉候上ハ無據次第ニ候

公使

一体本大臣ニハ敝國ヨリ己ニ全權ヲ委任被致候旨報明ノ上各大臣
ト夫々談判及双方決議相成候後俄ニ調印ハ致兼候段申出候ハハ各

P.V.M 10 969

麟 王

大臣ニハ如何御考可被成候哉定テ本大臣ヲ以テ信スルニ足ラサル
モノト御見做可被成ト存候夫トモ猶信スヘキモノト被見做候哉
此御答ハ何トモ難申候乍然先頃中ヨリ商辨候處ハ我々共ハ徹頭徹
尾同一意ニ候且又我々共妥議及候處全ク上意ニ不應候ハハ直様不
都合ノ旨諭旨可有之儀ニ候得共左ニハ無之只兩洋大臣等へ下問相
成候トノ事ニ候得ハ全ク事ヲ重ゼラレ候迄ノ上意ニ可有之ト相考
候

公使

上意ハ左様ニモ可有之哉候得共各大臣方既ニ全權ヲ被奉本大臣ト
此一案ヲ商辨被致候上ハ南北洋大臣等ニ御相談可被及筋ニ候ハハ
右商辨中ニ御相談モ可有之筈ト被存候今日ニ至リ右様ノ次第ニ候
ハ全ク中變ノ御趣意ニ可有之ト各大臣御心底ニ疑念ヲ抱キ申候

P.V.M 10 970

王 沈

公使 十七日落手候御照會ニ對シ照復及ヒ可申候ニ付今日ハ其已前一應御趣意承リ度參衙候事ニ候此數月來各大臣方ト此ク迄熟商及ヒ候儀今日ニ至リ猶兩洋大臣等ノ意見ヲ被要候トノ事ニ候テハ各大臣全權ノ名ハ其實無之モノニテ最早各大臣ト事ヲ議候トモ了結可致見込無之ト存候右故其趣ヲ以テ本國ヘモ報明及ビ將其趣意ヲ以テ御照覆可及心得ニ候本大臣ハ駐劄ノ任有之候故即今動身ハ不致候得共若シ特派ノ使節ニ候ハハ今日ハ既ニ歸國候テ可然場合ト存候右趣ヲ以テ御照覆有之可然候我々共於テハ決テ中變ノ見込ハ無之

沈 王

崇麟 此度ノ儀ハ全ク上意ニ出候儀ニテ我々共迎モ右様ノ諭旨ヲ奉シ可申トハ最前ヨリ相考不申候御諭ノ如ク最前ヨリ南北洋大臣等ニ相談可申候事ト存候得ハ其節相談可致事ニ有之候得共其節ハ左迄ノ事ト存不申故ニ候

公使 上意不被料トノ事ハ本大臣迎モ同様ノ事ニ候乍然既ニ全權ヲ奉シ双方熟商ノ上協妥及候丈ケハ右全權ノモノニテ調印ハ可有之儀ニテ候本大臣モ今日迄御相談申候所本國君上ノ旨ヲ候シ批准無之事ハ無之トモ難申候得共既ニ全權ヲ受候上ハ其全權ヲ以テ畫押調印可致所存ニ有之候右故上諭ノ趣ヲ彼此トハ不申候得共各大臣於テ御調印難被成トノ趣意ハ不得其意儀ト存候

右ハ前ニ申述候通本衙門ニテ談判候事ハ外省又ハ外國ニテノ談判

候

公使 各大臣中變ノ御見込無之トモ爾後兩洋大臣等ノ申立ニ寄り如何様
變換ニ可至モ難計候處其節ニ至リ萬一モ先日來御相談置候處ト聊
ニテモ異常有之候ハ本大臣於テハ最早此一案ニ付テノ御相談ハ
承リ兼候尤其段ハ本國ニモ報明致候事ニ候

王 夫ハ未來ノ事ニ候

公使 未來ノ事ニハ候得共今日預メ聲明致置候ハ即本大臣ノ職掌ト心得
候本國政府ヨリ何等可申越哉ハ難計候得共特別ノ命令無之間ハ該
案ニ付各大臣ト御談判ハ不致候

王 左様ニ候哉乍然貴大臣ニハ右様ニ相成候方ヲ宜ト被存候哉又ハ不
相成候方ヲ被望候哉



公使 固ヨリ左様不相成様希望候
我々共モ御同望ニ候此度ノ上諭ハ全ク事ヲ被重候上ヨリ出候儀ト
推察候中變候トノ御疑念ハ御無用ニ候此數月間數度ノ商辨ヲ經テ
一字一句ノ間迄商榷致候ハ今日ニ至リ中變可致存寄ニテ致候事ニ
無之儀ハ御諒察有之度候

公使 御尤ニハ承リ候得共既ニ調印ノ期ニ立迫リ突然右様ノ御照會有之
候テハ本大臣ニハ全ク侮弄ヲ受候様ニ心得申候右モ地ヲ更へ御考
被成候ハハ相分リ可申候就テ伺置度儀有之兩洋大臣ノ議奏迄ニ何
程ノ時月ヲ費シ可申候哉

王 兩三ヶ月モカカリ可申候殊ニ氷河ノ候故餘計ニ手間取可申候
公使 猶一事伺度候外國事務ニ關シ候テハ六部九卿翰詹科道等ニ御下問

公使 其事ニハ無之調印ノ手續兩様有之トノ事ヲ承リ候事ニ候
 王 固ヨリ兩様ニ候外省ニテハ外國ニ派遣候モ同様ノ事ニテ調印ノ上
 批准ヲ候シ候手續ニ候本衙門ニテハ鞏轍下ニ居リ候事故談判相繼
 リ候處ニテ内旨ヲ候シ候テ然ル後ニ調印致候譬へハ商家杯ノ手代
 代物持參他方へ參リ賣捌候節ハ其手代ノ意ヲ以テ其價ヲ定メ賣上
 ケ候後主人へ申出候事ニ候得共店頭ニ居リ商賣候節ハ主人ニ承リ
 候上ニテ値段ヲ定メ賣渡シ方致候モ同様ニ候
 麟 右ニテ最早御疑念ハ解ケ申候事ト存候
 公使 先日各大臣ト御談決致置候諸件分毫ノ變換モ無之調印ニ相成候上
 ニ無之テハ決シテ疑念ハ解ケ不申候今日ハ王爺へ御面教相伺不申
 ハ殘念ニ付各大臣ヨリ今日申述置候趣ハ^委細御申入置被下度相願

沈 衆議ヲ被取候事ニ候哉又ハ全ク宸裁ニ出候哉
 別段成規ハ無之其場合次第ニ候格別重大ノ事ニ候ハハ特旨ヲ以テ
 六部外諸官ノ議ヲ被問候事モ有之候又兩洋大臣等へ議奏セシメ候
 事モ有之候乍然多分ハ宸裁ニ出候事ニ候
 公使 球案一件ノ如キハ部議ニ被付候事ニ候哉
 沈 右ハ部議ニ被付候事ハ無之先日諭旨ノ通り兩洋大臣等へ下問被致
 候ノミニ候
 公使 只今御申聞相成候内外官ニ付全權調印ノ手續兩様御座候趣ハ一定
 ノ例規ニ候哉
 王 右ハ諭旨次第ニ候初來ノ國使杯ハ多ク外省ニ於テ條約談判爲致候
 訂約ノ上改修等ノ談判ハ本衙門ニ於テ致候事多ク有之候

王 沈

候尙不日御照復ニ及可申候

承知致候^委細可申入置候

右ニテ畢ル

252

P.V.M 10 977

(別紙)

大日本國欽差全權大臣宍戸

爲

照復事、明治十三年十一月十七日、接准

貴王大臣照會、内稱、光緒六年十月十四日、欽奉

諭旨、總理各國事務衙門奏擬結琉球一案各摺片、著交南北洋大臣等妥議

具奏、俟覆奏到日、再降諭旨欽此等因、查、本大臣與

貴王大臣、各奉

諭旨、商辦該案、本大臣開懷布忱、一以和好爲主、竟致妥協、至

貴王大臣面經聲明畫押訂約當在十日内外、詎圖卒然中沮、本大臣不

堪惋異、惟

貴衙門既總理各國事務、

253

P.V.M 10 978



貴王大臣又特奉

諭旨、辦理該案、而其言之不可為準如此、本大臣將何從而取信、

貴王大臣於該案欲有所更端相商、本大臣實不願預聞也、除鈔錄來文

咨送本國政府以取進止外、相應照復

貴王大臣查照可也、須至照會者、

右 照 會

大清欽命總理各國事務王大臣

254

明治十三年十一月二十三

日

P.V.M 10 979

135

○ 宍戸公使ヨリ井上外務卿宛

機密信第五一號

明治十三年十二月一日

(琉球問題今後ノ措置ニ關スル件)

機密信第三十三號接到御申越ノ趣致承知候

田邊書記官歸朝爲致候付當地ニテノ見込ハ逐一御承知被下夫々御評議モ

可有之ニ付萬御手落ハ無之事ト存候ヘトモ尙マタ熟考候ニ卑職ヨリ總署

エ申込置候次第ハ對話筆記并ニ照覆書ニテモ御承知ノ通ニ御座候處イツ

レ此儀ハ早速本國政府エ申遣シ進止ヲ取り候得ハ已ニ總署エモ申入置候

事ニ付何卒御廟議被爲盡候上我政府ヨリモ直接ニ壹通ノ照會被差送總署

ノ不好意思ヲ御詰責被成置候テハイカカ可有之哉全体舊年米前統領居中ノ

255

P.V.M 10 980

件ハ申迄モ無之其後右書中ノ趣意ニ照シ辨理イタシ度段モ清政府ヨリ申出候ニ付我政府ニテハ球島處分ハ清政府エ關係無之事ト相認メナカラ最前ヨリ隣好被爲破候御主意無之事ニ付枉テ今度辨理談判ノ運ニモ相成候事ニ候處兩國全權會同商議三ヶ月餘ノ久キヲ經テ漸ク一旦決議團圓相成候末假令上諭ニモセヨ今更兩洋大臣等へ下問イタシテハ甚以イカカ敷處置ニ有之然處近來清俄葛藤ノ件世上ニテノ風説モ無之ニ付昨日梶井鼎介事獨乙公使館エ尋問様子爲相尋候處同公使ニオキテモ慥ニ保證ハイタシ兼候へトモ近來ノ模様ニテハ多分平和ニ歸シ可申哉ノ見込ニ有之北洋近方エ呼集メ有之候四隻ノ軍艦モ夫々元ノ持場エ開散爲致候覺悟ノヨシ右等ニ就キ推察イタシ候へハ最前球案決議ノ節迄ハ總署ニテモ急速ニ了局可致見込ノ處其後俄都ヨリ會紀澤談判ノ様子ヲ報知シ先ハ平和ニモ可相

成哉ノ模様相見へ候處ヨリ俄カニ球案ノ決ヲ中沮イタシ兩洋大臣等へ下問云々ヲ以テ暫ク我國ヲ釣リ付ケ置キ來春迄遷延スルノ策ヲ一決シ清俄葛藤了局ノ模様ニ因テ球案ノ結不結ヲ決シ候主意^歟ト被察候亦萬一總署ニハ不好意思無之念ヲ入レ候タメイタシ候事ニモセヨ今日ノ模様我國ニオキテハ飽迄モ其主意ヨリサシ起リ候總署ノ不好意思ト見做シ處分イタシ置不申テハ其策ニ不陷トノ保證ハ不相成事ニ候就テハ來春ニ至リ最前談決ノ主意ニテ無異議了局イタシ候へハ勿論其儘調印ノ運ニ相成可然ノ處萬一モ變議ノ節彼ノ侮弄ヲ受ケ不申タメニハ今日先ツ一鞭策御加へ置相成度事カト被存候間此段篤ク御評議被爲遂度御事ト存候尤彌前議ヲ變シ候節ハ丸々破談ニ相成候外無之候へトモ當今ノ處上諭ニ托シ調印ノミヲ遷延イタシ候事ニテ表向不好意思ヲ顯シ候ニハ無之候故丸々破談ノ運ニ相成

右申上度如此候也

明治十三年

十二月一日

全權公使

六 戸 磯

外務卿 井 上 馨 殿

申間敷候間此マタ厚ク御熟慮後來ノタメ十分ノ御見込被爲在度奉願候
西德二郎事八月二日俄都出發ノ段申越候ニ付其依頼ニ任セ支那地内外蒙
古通行ノ護照等夫々相運サシ送り置候處遅クトモ十一月初旬迄ニハ當地
エ罷越可申答ノ處未タ爲何様子モ不相分候ニ付此マタ俄公使館ニテ梶山
ヨリ爲相尋候處俄代理公使申分ニハ十一月三日「キヤクタ」(俄地ニテ
所謂賣買城ナリ)ヨリノ書狀到達イタシ候ヘトモ西氏ノ様子ハ承リ不申
候間多分八月頃ハ雨多キ時節ニ付途中ニテ延引イタシ候事ニモ可有之尙
様子承リ合セ返答イタシ可申トノ事ニ有之葛藤一件ハ先般卑職ヨリ相尋
候節同様ニテ同代理公使ニハ何事モ承知イタシ不申趣相答候押テ相尋候
事ニモ相成兼候扱マタ先日新聞ニテハ俄皇退隱ニテ皇太子へ萬機ヲ被讓
候哉ノ趣モ有之候處右ハ決シテ無之事ノヨシ同氏申居候ヨシニ御座候也

機密信第五五號

136

○宍戸公使ヨリ井上外務卿宛

明治十三年十二月二十八日

(十二月二十七日總署宛照會文發送ノ件報告)

以機密信啓上候本月二十四日井上毅田邊太一同行着京全權御委任狀及内訓狀第三十八號機密信トモ落手井上毅ニ被仰含候廟謨ノ趣ヲモ同人口頭ヨリ直ニ承リ委曲領悉仕候訓狀ノ趣ニ據リ候得ハ今般ノ儀總署大臣共自カラ其非ヲ悟候様丁寧反復論駁仕候方ニモ可有之ト被存候得共彼既ニ上諭ノ兩字ヲ以テ專ラ我ヲ拒ムノ辭柄ト致居舌上何様ニ論詰候共一切因循遷延ニ附シ可申ハ勿論ニ被存將清俄葛藤未解和戰ノ機モ未定ノ際廟堂オキテモ前途ノ御計算可被爲定御都合ニモ承リ候旁兎ニ角急切ニ相迫リ

260

F.V.M 10 985

261

候方得策ニ可有之見込候ニ付態ト面會ハ不申入直ニ別紙啓文及照會寫ノ通昨日總署エ差出大唱^喝一聲彼ヲシテ疑懼^懼ヲ抱カシメ候方略ニ出候テ爾後彼方ノ模様ニ寄猶臨機應答仕候心得ニ御座候照會書論述仕候處ハ嚮ニ田邊太一ヲ以テ面稟可爲致此方見込ノ趣モ有之候得共右ハ不相用全ク内訓狀所載ノ旨ニ基キ下草致シ且緩急可投機トノ訓意ニ依リ其急ノ方ヲ相用ヒ候事ニ御座候自然右談判不幸不相繼内訓狀所示ノコトク卑職歸朝ノ運ニモ相成候ハハ閉河ノ際ニ付芝罘迄陸行同所ヨリ乗船仕候様ニモ可仕哉預算仕候就テハ本邦ヨリ軍艦ニ無之トモ官船同所エ御差廻シ相成候ハハ多少体面モ宜敷都合可然ト存候右ハ其期ニ至リ以電信申立候事可有之候條預メ御含置被下度存候井上毅來滬ニ付上海西字新聞ニハ既ニ球案ニ付云々ノ風説申觸シ故ニヤ先夜英公使「ウエード」氏晚饗ノ節同人ヨリ

F.V.M 10 986

相尋候趣モ有之候得共未タ内情ヲ吐露可仕場合ニ無之將同人ノ容喙等御座候テハ都テ不都合ニモ被存候間衆客來聚ノ席ニモ有之旁草卒ニ挨拶致置候處昨二十七日同氏來館有之候乍然右談話ニ涉リ可申ト存態ト昨夜來風邪ニテ頭痛烈敷打臥居候趣ヲ以面會不致候處果シテ該案ノ事情承リ度參館候處面晤ヲ不得遺憾ノ段通辨ノモノ迄申述歸去仕候右モ御含迄茲ニ附陳仕候

右申上度如斯御座候也

明治十三年十二月二十八日

特命全權公使 宍 戸

璣

外務卿 井 上 馨 殿

(別紙啓文)

逕啓者、本大臣前日照復

貴衙門、報明咨送本國、以取進止、本國現再差大書記官井上毅前來、齋到咨文、意實與本大臣相符、且着本大臣有所迅速回報、事屬緊切、惟自貴王大臣前約畫押訂約、業經二閱月餘矣、理不容再稽、本大臣須期十日有所咨回、切盼迅賜照復爲懇、尙此順頌
日社、

宍 戸 璣 十二月二十七日

中 堂
王 爺 台 啓
大 人

○ 宍戸公使ヨリ總理衙門宛

(別紙照會文)

明治十三年十二月二十七日

(上諭ニ關シ清國政府ノ處置ヲ責ムル照會)

大日本國欽差全權大臣宍戸

爲

照會事、查球案一事、初

貴衙門願照

美國前統領信內所稱情事、次第辦理、

前統領意在兩國特派大員妥商辦法、

貴衙門照會我外務卿、問現派何員前來商辦、我國

特簡本大臣、當辦理之任、付以全權字據、照復

264

P.V.M 10 989

265

貴衙門、以相知照、而

貴王大臣亦照會我外務卿、將欽奉

上諭、着該衙門王大臣會同、妥商辦理之

旨、見相報明在案、蓋本大臣奉全權辦理之

旨、實由

貴國發端、願專照

美國前統領信內之意、而

貴王大臣特奉辦理

諭旨、亦明據兩國特派大員妥商辦法之意、以與本大臣相值、夫要兩國特

派大員者、將舉兩國之議、尙委該兩大員、任其妥商、以杜多岐、且

以便干議協之後、畫押爲據、不然、則何取干特派之義、而

P.V.M 10 990

前統領亦何以此相勸說乎哉、此
貴國願照

前統領信內情事之日、蓋業經明悉、不待更說也、爾來兩國大臣籌商
措畫、經三閱月、幸得彼此意見相同、(貴曆九月初七日照會云、兩
月以來、已商定大致、擬加約條、及另立憑單、彼此意見相同、)最
後、接

貴函、以商得辦法大略、期日而晤、及期、

貴大臣提出三通約稿、一琉球條約案、一增加條約案、一要修改現行
條約憑單、本大臣並無異議、

貴大臣說、二通條約案、畫押之後、要

批准交換、本大臣乃期三個月後、在

大清國都交換、

貴大臣即時抄錄、以附于原稿之後、

貴大臣又見詢以交受兩島之期、本大臣期來年陽歷二月、(貴曆正月
定爲派員交受之時、

貴大臣又說待交付兩島之次月、開辦加約事宜等語、亦均經

貴大臣抄錄、以附于稿後、事實在十月二十壹日、(貴曆九月十八日

日)此乃開辦施行、已有一定之期、皆出于

貴王大臣之口、而成于

貴王大臣之筆、均具在案、不可撤銷、想、

貴王大臣亦無異辭也、夫兩國專簡大員、以議大事、任其妥商、而兩
國大員意見協同、言明在案、指日畫押、詎料遽將奉着南北洋大臣等

妥議具奏

諭旨見報明、本大臣專準據有前日着該衙門王大臣辦理之

諭旨、一意與

貴衙門商事、固與

南北洋大臣、沒相干涉、本大臣既受辦理之

專命、本大臣所說、是代本國說、

貴王大臣前日特奉辦理之

諭旨、

貴王大臣所說、即代

貴國說、本大臣純知以

貴王大臣之言爲憑爲據、豈知

268

P.V.M 10 993

貴衙門之外、更有妥議大臣耶、言出干

貴王大臣之口、文成干

貴王大臣之筆、而猶不足爲妥商之準、不知

貴王大臣前日所奉者何旨、所謂辦理者何事、

貴王大臣或謂未奉專對之命歟、將置

前統領特派大員之旨于何地焉、又或謂前言未足爲準、辦理之命未足

據歟、則前日之事、不異於姑爲假冒以欺弄我國、是豈和好之國所宜

有也耶、本大臣荷商辦大事、全權字據、夾帶在躬、不能忍受欺弄、

徒曠時日、昨接本國咨文、本大臣亦不免緩慢之譴、所以更爲

貴王大臣極論不諱、今只得有言明

貴王大臣日內不能依成議以了此局、則本大臣斷知

269

P.V.M 10 994

貴國意果不在和好也、
貴王大臣幸迅賜照復可也、須至照會者、
右 照 會

大清欽命總理各國事務王大臣

明治拾參年拾貳月 貳拾柒

日

P.V.M 10 995

137 ○ 宍戸公使ヨリ井上外務卿宛
機密信第一號

(交渉不調ト看做シ公使歸朝決意ノ件)

明治十四年一月八日

以機密信致啓上候先信申上候通今般ノ儀ニ付照會ニ啓文相添總署エ差送
リ候末本月三日右照覆ニ啓文ヲ添差越候ハ別紙甲寫ノ通ニ有之矢張前議
ノ如ク南洋大臣ノ具奏齊到不致等云々ノ申分ニテ別段相替リ候返事モ無
之候間最早斷然タル照會差送り訓條所載ノ如ク歸朝ヨリ外有之間敷被相
考候間別紙乙寫ノ通照會相認其翌日四日右寫田邊書記官ニ爲持總署エ差
遣シ大臣ニ面會ノ上一應相示彼方所見ヲ爲相尋候右ハ殆ト決裂ニ可至文
書ニ有之候間交際ノ通義ニ依リ一應内覽爲致且ハ彼方ノ意衷ヲモ爲相探

P.V.M 10 996

候積ニテ候當日對^話ノ趣ハ別紙丙概略書ニテ御承知有之度候彼方ニテハ
 只管具奏到齊候モ近日ノ内ニ可有之ニ付夫迄見合可然旨内談ニ事寄セ諷
 説仕候事ニハ候得共公然申出候事ニモ無之此迄ノ成績ニヨリ候ヘハ既ニ
 公然ト申出候事サヘ今般ノ如ク中沮ニ及候程ノ儀内話ノ云々ニ拘リ遷延
 ノ點策ニ陷候テハ益事機ヲ誤リ可申寧口相迫リ候方可然相考候ニ付猶其
 翌五日ヲ以テ右照會本書田邊書記官ニ爲持差遣シ昨日内話ノ趣モ有之候
 得共公確ノ御返答ニ無之上ハ該照會爲見合カタク候旨以口上爲相斷照會
 爲相渡申候一体彼方ニテハ專ラ爾洋大臣具奏ノ上諭ヲ以テ城壁ト致候事
 ニ付我ヨリハ既ニ全權ノ命有之候以上ハ他ニ妥議ノ人有之間敷右ハ兩國
 委員會商ノ通義ニ無之筋ヲ以テ論破イタシ右ヲ以テ使事不成ト見做シ彼
 所謂上諭云々ヲ認不申處此方ノ論點ニ有之就テハ前日差送り候照會ニ對

猶今般ノコトキ照覆有之候處ヲ聊タリトモ容恕イタシ置候節ハ竟ニ彼所
 謂上諭ナルモノヲ認候姿ニ相成隨テ後日談判中變候折モ彼又上諭ヨリ辭
 ヲ設彼是ト可申出左候得ハ其末談判不折合迄ニ止リ彼我トモ甲乙ナキモ
 ノノ如ク成行可申ニ付今日ニ及ヒ痛ク彼ノ會商ノ通義ニ戻リ我ヲ侮弄候
 成績ヲ押へ彼既ニ前議ヲ棄候者ト見做シ最早球案ニ於テハ我方ニテハ全
 球ヲ領シ彼ヲシテ再ヒ異議ヲ容レシメサル迄ニ明言イタシ所謂靜位ニ立
 候處ヲ以歸朝ノ^運ヲ附候心得ニ候然ル上ハ彼後日上諭ヲ奉候トモ成約ヲ
 變シ談判候得ハ最早彼ヨリ申出候事不相成都合ニ有之萬一モ成約通畫押
 ノ都合ニ相成候ハハ彼ヨリ申出候次第固ヨリ差支無之談判振モ有之事ニ
 御座候間成不成トモ於我不都合無之儀ト相考機會ヲ外サズ急速照會オヨ
 ヒ候事ニ候右様ノ次第ニ及候上ハ照會文意ノ如ク此方ニテハ引續キ歸朝

ノ報明イタシ歸裝ヲ理候覺悟罷在候先信芝罘迄官船御仕出シ相成度旨申
上置候得共猶再考候得ハ夫迄ニモ及中間敷被存候間御斷リ返シオヨヒ候
勿論歸朝發途マテニ彼方ヨリ何等申出候哉モ難計或ハ都合ヨク相抄取必
畫押訂約候様ノ運ニ至リ中間敷トモ難申候得共今日迄ノ成績詳報仕此
方決心ノ處預メ申上置候彌發途ノ期ニ至リ候ハハ以電信其段申上候
右申上度如此御座候也

明治十四年一月八日

特命全權公使 宍

戸

磯

外務卿 井 上 馨 殿

（別紙丙號省略）

P.V.M 10 999

別紙甲號 一

逕復者、接准

來函、備悉壹是、查、向來中外交渉、凡重大事件、均須奏奉
諭旨欽遵辦理、本大臣等、既奉商辦球案之

旨、自應將彼此意見不協之處、和衷商辦、議有大概後、奏請
聖裁、至如何奉

旨、固非臣下所敢擅擬也、

來函期以十日咨回、除另備文照復外、特此奉復、順頌
日祉、

名另具 十二月初四日即
我一月三日

P.V.M 10 1000

寶璽 沈桂芬 毛昶熙 景廉 李鴻藻 麟書 王文韶 崇禮
夏家鏞

宍戶大人台啓

276

別紙甲號 二

大清欽命總理各國事務王大臣

照復事、光緒六年十一月二十六日准

貴大臣照會、詳叙先後會商球案情形、而以本王大臣等奏奉
諭旨著南北洋大臣等妥議具奏一節、爲欺弄

貴國、非和好之國所宜有、又

貴大臣亦不免緩慢之譴、並稱月內不能依成議以了此局、

貴大臣斷知本國意果不在和好各等因前來、查此案彼此遠

旨會商、意見相同、是以本王大臣等奏明請

旨、嗣奉

277

爲

P.V.M 10 1002

P.V.M 10 1001

REEL No. 1-0326

0172

上諭著南北洋大臣等議奏等因欽此、良以此事非尋常交涉案件、正欲彼此
永敦和好、不能不格外詳慎、以昭鄭重、並無所為欺弄也、且
貴大臣亦可將本署前次照會各情、報明
貴國

貴大臣又何至任緩慢之咎耶、此時本王大臣亦無須空言辨論、計南北
洋大臣等議覆到齊、當不甚遠、一俟奉有

諭旨如何辦理、自當即行照會、以免懸盼、並可知本王大臣等、初非故為
延宕、意實重在和好耳、為此照復、須至照會者、

右照會

大日本國欽差全權大臣宍戶

光緒陸年拾貳月 初 肆

日 我カ十四年一月

三日ナリ

P.V.M 10 1003

別紙乙號

大日本國欽差全權大臣宍戶

照會事、准

貴王大臣光緒六年十二月四日照復、內稱、前所議定約案、彼此遵旨
會商、意見相同、奏明請

旨、奉

上諭、著南北洋大臣等議奏等因欽此、所以格外詳慎、以昭鄭重、並無所
欺弄、意實重在和好等語前來、查、派使有道、必附其權、會商為據、
必依畫押、無權之使、使非其使也、兩國有違言、特簡大使會商、意
見既同、而一使中沮、自謂無專對畫押之權、是為欺弄他國、不得謂

P.V.M 10 1004

貴王大臣仍不能計日畫押、本大臣已知使事之不成、無復意于期必成焉、查、內政不相擾、兩國之約款也、議約不相欺、萬邦之通義也、徵之公道、無須多言、今除以使事不成復命本國、兩國大局、一由本國處分外、本大臣只得有聲明、曰、琉球一案、貴國却我好意、自棄前議矣、自今之後、理當永遠無復容異焉、須至照會者、

右 照 會

大清欽命總理各國事務王大臣

明治拾肆年壹月 初伍

彼カ光緒六年十二月初六日ナリ

日

P.V.M 10 1006

意在和好、本大臣前次照會既悉、而貴王大臣諉爲貴國之例、惟貴國自行貴國之例、本大臣亦不能曠本國之命、琉球一案、原由貴國發論、簡使會商、亦從貴國所求、本國自理內政、本無須與貴國媿々解說、今貴國自棄會商之通法、是自棄前議也、前約二島交受、期以二月、今已迫矣、而

P.V.M 10 1005

(別紙丙號)

○田邊書記官總署大臣ト對話記事

明治十四年一月四日

此度照會可相成草案持參總署エ相越候處總辨葉毓相馮芳緝隨例相接候ニ付今日參衙候ハ重大ノ事ニ候間大臣方ニ面謁致度旨申入候處王文韶麟書崇禮夏家鎬出會被致候間書面差出

太一 昨日照覆被差越我公使ニモ一覽被致候我公使ニハ本國ヨリ申越候趣モ有之明白ノ御回答ヲ望被居候處矢張先頃中ヨリ御申聞有之候處ト一樣ノ御趣意ニ候上ハ最早不得已場合ニ付此紙面ノ通照會可被及決意ニ候乍然右ハ重大ノ事ニ付萬國交際ノ通義ニ依リ一應各

232

F.V.M 10 1007

位ノ御内覽ヲ經別段御考モ無之候ハハ明日表通り御照會可及トノ事ニ付右紙面持參面謁相願候事ニ候

右大臣書面一覽ス

王 御書面ノ趣一覽致候今日ハ我々四人而已ニ付何トモ御回答モ致兼候得共外同僚エ相談候トモ此又御回答致兼可申候爾來如此書面可被差越御決意ニ候ハハ御差越被成間敷トハ我々同列ハ勿論我皇上トテモ被申兼候事ニ候乍然御差越被成候テ可然トハ固ヨリ御答難及候

右答了ノ上書面欺弄ノ文字ニ付例ノ總署從來ノ例規ニ寄り取扱候事ニテ聊其様ノ筋ニ無之旨辨論有之候間双方全權ノ委任有之旨披露ノ上談判有之意見相同ノ後猶南北洋通商大臣等ノ妥議具

233

P.V.M 10 1008

太一

先般ノ照會ニモ申述候通今般ノ事此方於テハ甚惋異ニ不堪儀ニ付
 右ノ爲小官上海迄派遣本國ト電信往復ノ末最前此談判ニ付立合居
 候御承知ノ井上毅本國政府ノ命ヲ奉シ到京候テ我公使ニモ一日モ
 被閣カタキ次第ニ御座候一体各位於テ全權ノ命ヲ被奉旨明ニ報告
 有之候得ハコソ我公使ニモ深ク信據致シ御談判候事ニテ既ニ意見
 相同トマテ被申聞候上ニテ畫押訂約ノ期ニ至リ他ニ妥議ノ大臣可
 有之トハ思モ不寄義畢竟有事ノ際双方全權ヲ派シコレヲ二人ニ

P.V.M 10 1010

麟王

太一

奏ヲ被要候トノ事假令各大臣ノ心裏欺弄ノ意無之共其跡欺弄
 ニ不殊候旨辨駁致シ數次論駁未
 今日ハ我公使ヨリノ命ヲ受此書面内覽ニ供シ御所見相伺候タメ罷
 出候儀ニテ右等ノ議論ヲ致候爲ニハ無之御難問ニ付一應此方ノ見
 込ト萬國ノ通義トヲ以テ辨論ハ致候得共互ニ相争候トモ其詮無之
 義ニ付右ハ措置只今御回答相成候通此書面ハ差出候トモ不差出候
 トモ此方勝手ニ被任候トノ御趣意歸館ノ上我公使ニ可申通候
 勝手ニ被任候様トハ不申入候此方於テハ固ヨリ差留可申權理無之
 又可被差出トモ難申義ニ付右様申述候事ニ候一体御書面中使事不
 成ト有之候得共右ハ今日ヨリ御申出相成候事ニハ有之間布此迄御
 談判致候處前ニモ申述候通常衙門ノ例規ニ照シ且不容易大事ニモ

P.V.M 10 1009

麟王

取準可申哉即使事成ヘカラサル次第ニ候右ハ我公使ニ代リ設身處地御考被成候ハハ相分リ可申事ニテ此方ニテハ斷然使事不成ト存候

此ハ總理衙門大臣ノ地位ヲ以テ御話申候事ニハ無之全ク私話ニ候

一体兩洋大臣等ノ具奏中既ニ一二ハ奏上ニ相成候分モ有之只未タ到^齊不致迄ニ候此段重大ノ事ニ付彼等ニモ決テ相怠リ可申筋ニ無之間必急速奏上可及左候得ハ三日五日乃至八日十日歟何レ近日中ニハ定テ其運ニ可到候其節ニ至リ成約通り允可相成候ハハ直様畫押ニモ可及事ニ候處今般此書面被差出候後ニ候トモ宍戸公使ニハ矢張畫押可被致哉左候得ハ聊不妙様被存候左迄着急ニハ及申間敷事カニ候

P.V.M 10 1012

王

委シ談判セシメ候ハ他議ヲ防キ事ヲ了セントスルノ趣意ニ有之美國前統領ノ所謂モ其意ニ不外存候然ルニ今般如此次第ニ至リ候ハ即我使臣ヲ侮弄被致候筋ニテ昨日ノ御照覆ニモ他ニ御答振モ無之矢張前議ヲ主張被致候上ハ即使事不成ト申候トモ可然儀ト心得候右ハ上諭故無據候此度ノ儀ハ不容易筋ニ付南北洋大臣等ニ妥議セシメラレ候事ト存候縱令兩洋大臣ヨリ具奏候所有之當衙門所見ト符合致候ハハ申迄モ無之符合不致候トモ矢張當衙門於テ御談判ハ致候事ニテ即談判ノ權當衙門ニ有之候

太一 無容易儀ニテ兩洋大臣等ノ具奏ヲ被要候事ニ候得ハ談判協同ノ前ニ可有之義ニ候既ニ協同ニ及ヒ其協同ハ即双方全權ノ大員協同ノ事ニ候然ルニ其全權ヲ被奉候方ニ其權無之ト言明被致候ハ何レニ

P.V.M 10 1011

申述度候
 承知致候
 右畢リ太一起立外套ヲ着候折柄迄王麟崇三人起來猶前段私話ノ
 趣ヲ反覆申聞交際上ニハ曲折モ有之候事能々公使エ可申陳ト鄭
 重ニ申聞候事

太一 私話ト被仰候ハ此ヨリモ以私御尋申上候右到^齊期ハ預メ日ヲ
 被期候事出來可申哉
 王 夫ハ難致候得共決テ曠日候事ハ有之間敷勿論具奏到來候共猶未到
 候杯申遷延候様ノ儀ハ我々ニモ上諭ヲ奉シ兩國間ノ事ヲ處辨候儀
 決テ致シ不申候
 (此段期日ヲ押猶畫押ヲ取極候爲書面ニテモ受取可申ト迄談詰可
 申哉トモ存候得共右ヨリ彼遷延策ニ陥候端緒ヲ開候様相成候テ
 ハ不可然哉トモ回顧致シ暫ク取合不申事ニ候)
 太一 預約候事難成候ハハ竟ニ準ヲ取候處無之ト存候兎ニ角先刻御申聞
 相成候御口上ヲ以テ歸館ノ上我公使ニ可申陳候
 王 右ハ表向ノ御挨拶ニ候猶貴所迄私話及候處ヲモ并テ委曲公使ニ被